

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月19日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720131

研究課題名（和文） エミール・ゾラの小説描写と視覚芸術の問題

研究課題名（英文） Question raised by Émile Zola's literary depictions with respect to visual arts

研究代表者

高橋 愛 (TAKAHASHI AI)

法政大学・社会学部・専任講師

研究者番号：80557281

研究成果の概要（和文）：

本研究においては、エミール・ゾラの小説描写を19世紀の絵画史、写真の受容と発展など視覚芸術との関わりから検討した。ゾラの小説、美術批評、書簡を、アカデミズムの影響下にある絵画、マネや印象派画家たちの芸術活動、ジャポニスム等を視野に入れて分析し、『ルーゴン・マッカール叢書』における描写の特質を照射した。最終的に、雑誌論文5本を発表した。

研究方法については、2010年度、2011年度の夏期休暇中にフランスの美術館と美術館附属図書館へ赴き、検討すべき絵画・写真作品、文献を調査した。学期中は大学図書館等で本研究に関する資料を収集し、精読と分析の作業を進めた。

研究成果の概要（英文）：

This study examines Émile Zola's literary depictions in connection with the visual arts through an exploration of the history of 19th century paintings and the reception and development of photography. After a thorough reading of Zola's novels, artistic critiques, and letters, we conducted an inquiry that considers themes such as *Japonisme* paintings, the artistic pursuits of impressionists, and the works of painters under the influence of academism to expose the particularities of Zola's depictions in his *Les Rougon-Macquart* series.

For our research, we visited French museums and their affiliated libraries during summer recesses of 2010 and 2011 in order to examine the paintings, photography, and literature that would become the subject of our discussion. During the academic year, we collected materials relevant to our research from various sources, such as university libraries, to enhance our analyses.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：(1)ゾラ (2)自然主義 (3)描写 (4)美術批評 (5)マネ (6)印象派 (7)アカデミスム (8)ジェルヴェクス

1. 研究開始当初の背景

『ルーゴン・マッカール叢書』(1871-1893)の刊行を通して、ゾラは19世紀後半に自然主義作家として知られるようになるが、同時に前衛絵画を擁護する美術評論家としての活動も行っていた。サロンや印象派の画家たちの展覧会に出品される多くの絵画作品を鑑賞し、批評する過程を経て、ゾラの小説描写は変化していく。

1980年代からのフランスを中心とするゾラ研究において、作家の描写の詩学を検討する研究は進み、「ゾラと絵画」というテーマの見直しも行われた。ところが、ゾラが小説家と美術批評家の活動を同時におこなったことによって培われた成果や小説内の描写にあらわれた影響、印象派のみならずアカデミスムの影響下にある絵画に示し続けたゾラの視線と小説描写との関わりについては、問題点として取り上げ、考察を深化し、さらに展開する必要があった。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀の絵画史、写真の受容と発展を視野に入れ、『ルーゴン・マッカール叢書』の描写を視覚芸術との関わりから総合的に検討することを目的としている。

具体的には、19世紀後半に書かれたゾラの小説の草稿と決定稿、美術批評、書簡を精査し、文学史における自然主義、美術史におけるアカデミスムと印象派絵画の位置づけを再検討したうえで、ゾラの小説描写の変化の背景や特質を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究を進めるにあたり、資料の収集と文献調査は国内およびフランスでおこなった。

国内での資料収集と文献調査。学期中は大学付属図書館(2010年度は主に武蔵大学図書館、2011年度は法政大学図書館)のILLサービスを利用して、本研究に関する論文を収集した。他大学の図書館が所蔵する文献については、その都度赴き、利用させてもらった。国内で入手できる書籍については購入した。

フランスでの資料収集と文献調査。2010年度、2011年度の夏期休暇中には、本科研究費によってフランスに滞在し、日本で入手できなかった資料の収集に努めた。パリ、ルーアン、オンフルール、ル・アーヴルの美術館、美術館付属図書館で検討すべき絵画・写真作品、文献を調査した。

これらの資料収集と文献調査、その後の分析の作業は次の行程によって構築された。

(1)『ルーゴン・マッカール叢書』の草稿資料、それに関連する書籍の入手ならびに分析。

(2)19世紀フランス美術に関する書籍の購入ならびに分析。

(3)19世紀フランス小説における描写の再検討。

(4)『ルーゴン・マッカール叢書』の決定稿を中心としたゾラの小説描写の分析。

各行程の具体的な内容は以下の通りである。

(1)『ルーゴン・マッカール叢書』の草稿については、コレット・ベッケルの監修で刊行が続いている *La Fabrique des Rougon-Macquart* (2003-)を入手し、学期中は国内でかなりの分析作業を継続することができた。休暇中には、フランスの図書館で補充に努めた。

(2)19世紀フランス美術に関しては、アカデミスムとモダニスムの二項対立を主軸とする見方に捉われることなく、第二帝政と第三共和政時代の絵画全体を社会的、文化的コンテクストに焦点を当て、俯瞰した。関連する文献を調査し、アレクサンドル・カバネルやジュール・バステイアン＝ルパーージュ、アンリ・ジェルヴェクスに関する資料をフランスで収集して、分析をおこなった。

(3)2008年に提出した博士論文を通じて、ゾラが小説描写の理論を主にバルザック、スタンダール、ゴンクール兄弟、フローベールの作品を読むことによって構築したことを明らかにしていた。本研究においては、こうした作家とつながりのあった絵画作品と小説描写の関係について再調査し、それらの描写に対するゾラの反応や影響をあらためて検討した。

(4)上記(1)から(3)までの分析を基に、歴史的・文学史的背景を意識して、ゾラの小説描写の独自性を明らかにした。

4. 研究成果

19世紀後半に、ゾラはマネや印象派画家たちの描写技法や表現を理解し、美術批評を通じて説明しただけではなく、一時代、一社会の現実を提示する『ルーゴン・マッカール叢書』の中で文字によって見せ、深化させた。それは、芸術の方式を受動的に学ぶのではなく、たえず発展させ、独自の新しいスタイルを確立させようとするゾラの気概をうつす。本研

究においては、写真の登場によって揺り動かされた当時の画家たちの状況とそれにもともなう絵画技法の発展、ゾラを支えた「自然主義」の思念を視野に入れ、19世紀後半におけるフランスの表象と心象を歴史的・社会的・文化的文脈で捉えながら、小説の改革が描写の面からもおこなわれたことを明らかにした。ゾラの批評的著作と文学作品を同時に提示し、理論的な発言と小説を有機的に連続したものとして読み解くことで、これまであまり高く評価されてこなかったゾラの美術批評の重要性を確認することもできた。写実主義、印象主義などの革新的な動向と密接に連動し、「絵画」と「文学」の共闘を通して「自然主義」の発展を願った小説家ゾラの軌跡を見直し、1880年代から作家が美術批評家としての活動を止めた理由までを検討した。この成果の内容を要約すると、以下のようになる。

1860年代後半からゾラが印象派の画家たちと続けた新しい芸術のための共闘は、1880年頃に終わりを告げる。「芸術のための芸術」を拒否して既成概念を壊し、「いかに描くべきか」を問いながら制作を続ける前衛画家たちの熱意に触発され、ゾラは「自然主義」という大きな芸術の変革を目指して印象派に接近した。しかし、小説家が作品の中で緻密に描くべきものとそれぞれの画家たちが画布に記録すべきものは次第に異なっていく。それは、20年に及ぶ芸術活動を経て、「文学」と「絵画」が各自異なるかたちで確立されたことをあらわす。カバネルの弟子で、アカデミズムの教育を受けながら自然主義絵画を制作するジェルヴェクスを、ゾラは1879年に「自然主義の仕事遂行している」と評したが、結局、この画家が制作するその後の作品を通じて、ゾラの期待する美学上の新しさは生みだされなかった。「自然主義者」と呼び続けたマネの死(1883年)や、画家たちの1880年以降における芸術創造の展開を通して、ゾラは自らの文学と同質の絵画を見出すことが難しくなった。つまり、「絵画における自然主義」の活路を開くことは出来なくなったと考えられるのである。美術批評家ゾラが1880年代に沈黙を続けた理由を、このような当時の状況を確認しながら検討し、人間と社会を深い熟慮に基づいて描こうとするゾラの思念を「小説描写」によって浮かび上がらせた。19世紀後半における文学者、芸術家たちの活動の過程について、具体的に明らかにすることができた。

成果の発表をおこなった媒体は、「5. 主な発表論文等」に挙げるとおりである。内容に

沿って分類すると、次のようになる。

ゾラの小説描写とアカデミズムの影響下にある絵画との関係をめぐっては、雑誌論文①において詳しく検討をおこなった。②と④においては、ゾラと印象派画家たちが活発に創作活動を続けていた頃のフランスの表象と心象について、『獲物の分け前』、『ナナ』、『獣人』の描写を中心に考察した。③では、ゾラのアート批評と小説描写の密接な関係性について、ジャポニズムを軸に論じた。⑤においては、ゾラの小説描写の発展をセザンヌの制作活動との関わりから分析した。

なお、19世紀における写真の受容とゾラの小説描写との関係については、文献調査と問題系の抽出に関してかなりの成果を得た。以上を生かして、2012年度4月より新たな研究課題に着手している(科研費による研究課題は「エミール・ゾラと写真をめぐる芸術創造の問題」、課題番号は24720158)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 高橋 愛、ゾラ『ナナ』と絵画における自然主義—マネとジェルヴェクスを中心に、*GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)、第51号、査読有、2012、pp. 21-30
- ② 高橋 愛、ゾラの小説における窓辺の女—近代都市パリへのまなざし、社会志林 (法政大学社会学部学会)、第58巻第4号、査読無、2012、pp. 49-59
- ③ 高橋 愛、ゾラにおけるジャポニズムの問題—美術批評と『愛のページ』の関係をめぐって、*GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)、50号、査読有、2011、pp. 33-41
- ④ 高橋 愛、ゾラ『獣人』と時の経過—変容する19世紀フランスの表象と心象、*GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)、50号、査読無、2011、pp. 151-158
- ⑤ Ai Takahashi, Zola et Cézanne, l'élaboration de deux forces descriptives, *Journal of Musashi University Research Center*, 査読無、2011、pp. 135-147

[その他]

ホームページ等

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/26/0002582/profile.html>

<http://repo.lib.hosei.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 愛 (TAKAHASHI AI)

法政大学・社会学部・専任講師

研究者番号：80557281

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し